

1 「生徒による授業評価」について

(1) 実施の目的

生徒の確かな学力を育成するため「生徒による授業評価」を行うことにより、各学校における教員の指導力の向上や授業の改善を図るとともに、生徒自らが学習への取組を見つめ直す機会とする

(2) 「生徒による授業評価」を踏まえた授業改善

授業評価の集計・分析結果を踏まえ、学校全体及び各教科・科目等の課題を把握し、その解決に向けて、研究授業や校内研修を実施し、授業改善に取り組む。

(3) 結果の公表

授業評価の集計・分析結果及び、その課題を踏まえた授業改善の取組等の実施結果について、生徒・保護者・学校評議員等に公表する。

2 実施対象及び回答総数

(1) 実施対象

全県立高等学校及び県立中等教育学校における各教科・科目の授業

○ 課程数

	全日制	定時制	通信制
実施課程数	141	21	2

○ 在籍者数 (千人)

	全日制	定時制	通信制
在籍者数	119.1	5.3	3.5

(平成28年12月時点の調査結果による)

(2) 回答総数 (平成28年12月時点の調査結果による)

○ 共通教科回答総数 (千人)

国語	地歴	公民	数学	理科	保体	芸術	外国語	家庭	情報
146.7	101.4	52.2	121.4	126.1	170.0	57.3	164.0	49.3	30.3

○ 専門教科回答総数 (人)

農業	工業	商業	水産	家庭	看護	情報	福祉	理数	体育	音楽	美術	英語
11,547	34,420	10,194	3,938	4,336	2,659	3,234	4,886	3,993	3,619	2,235	1,304	4,319

3 「生徒による授業評価」の実施時期と方法、分析等

(1) 実施時期

原則として年2回以上アンケート方式で実施する。1回目は夏季休業前に実施し、当該授業の課題等の状況を把握した。2回目は冬季休業前に実施し、課題の改善状況について把握した。

(2) 調査内容

各学校共通の内容として、3つの大項目、8つの中項目ごとに共通小項目を設け、「4 かなり当てはまる」、「3 ほぼ当てはまる」、「2 あまり当てはまらない」、「1 ほとんど当てはまらない」の4段階の評価を行った。

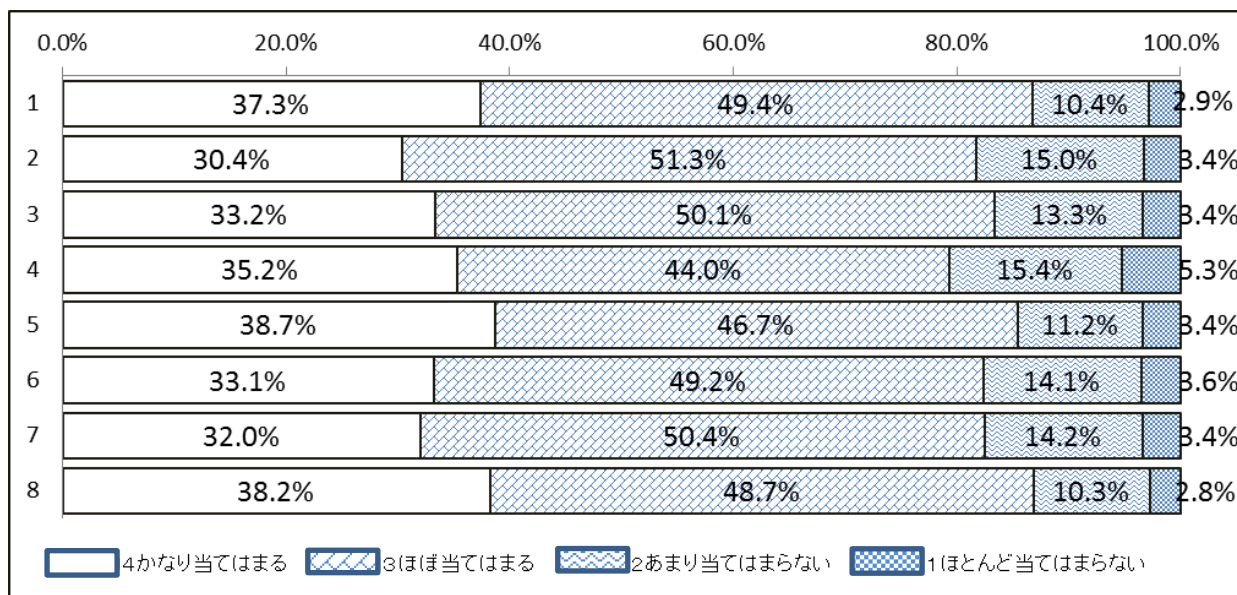
(3) 分析の方法

平成28年度の4段階評価「4 かなり当てはまる」、「3 ほぼ当てはまる」、「2 あまり当てはまらない」、「1 ほとんど当てはまらない」のうち、調査結果の傾向を顕著に示す「4 かなり当てはまる」に焦点を当てて分析を行った。

4 調査の結果

(1) 共通教科について

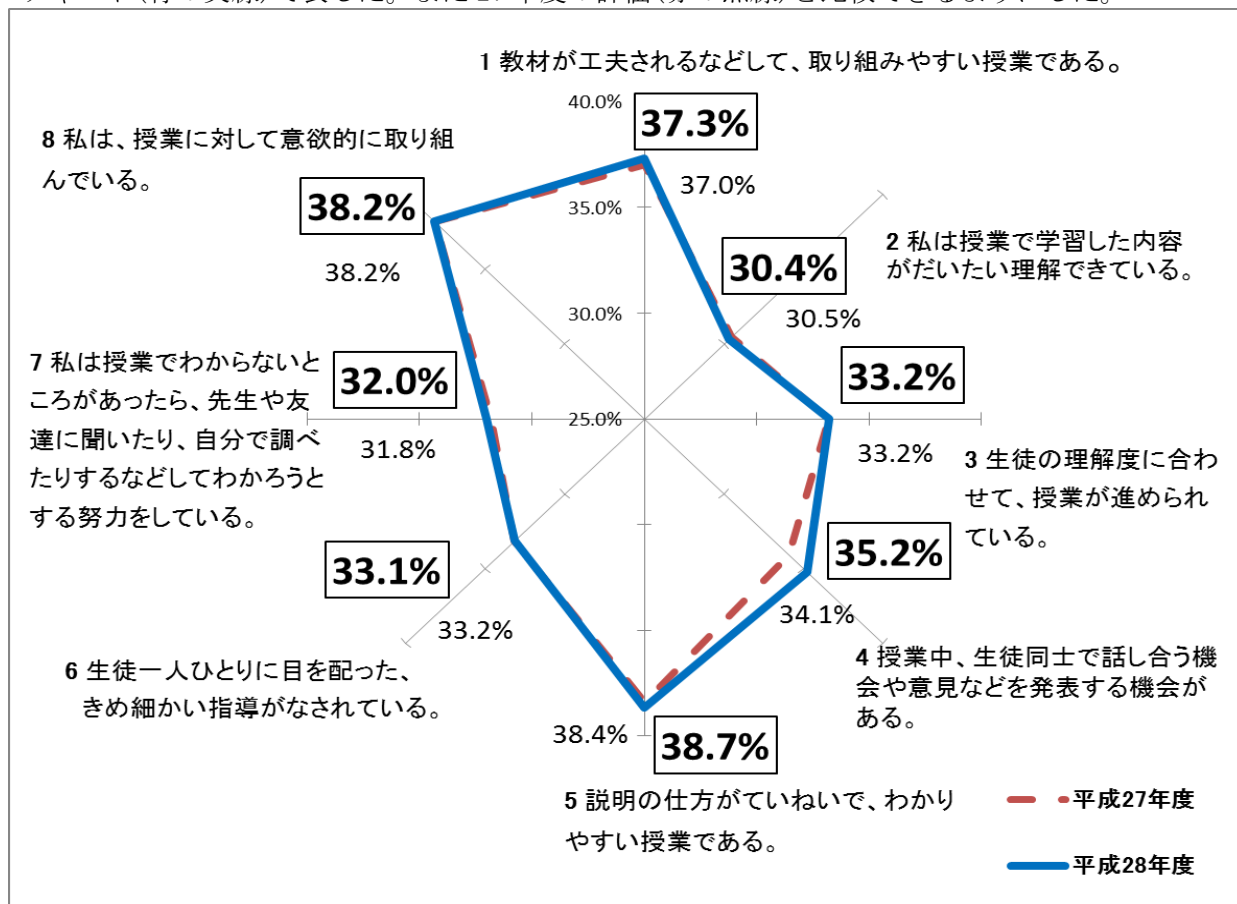
○ 共通教科の共通小項目に対する4段階の評価の割合は、次のとおりである。縦軸の数字1～8は共通小項目の数字。項目内容は第2図を参照



第1図 共通教科の共通小項目集計

※%は小数第2位を四捨五入

○ 全教科の共通小項目の評価の結果のうち、「4 かなり当てはまる」とした回答の割合をレーダーチャート(青の実線)で表した。また27年度の評価(赤の点線)と比較できるようにした。



第2図 共通教科の共通小項目ごとの評価結果「4 かなり当てはまる」の割合

○ 各教科の共通小項目の評価「4 かなり当てはまる」を表にし、全教科で比較した。

第1表 共通教科ごとの共通小項目の評価「4 かなり当てはまる」の集計

共通小項目	国語	地歴	公民	数学	理科	保体	芸術	外国語	家庭	情報	平均
1	37.1%	39.0%	36.8%	33.9%	33.5%	39.6%	43.8%	37.5%	37.2%	37.5%	37.3%
2	30.0%	30.0%	29.8%	25.8%	23.8%	38.5%	40.6%	28.1%	30.6%	27.7%	30.4%
3	33.7%	32.1%	32.0%	30.6%	28.2%	38.7%	41.1%	32.3%	31.9%	30.4%	33.2%
4	36.5%	30.2%	33.3%	30.2%	28.9%	39.8%	41.2%	39.7%	36.0%	34.2%	35.2%
5	39.8%	41.0%	39.3%	36.8%	34.0%	41.4%	43.4%	37.7%	36.7%	35.0%	38.7%
6	32.7%	29.8%	30.2%	32.4%	27.6%	37.8%	44.3%	33.0%	31.6%	33.1%	33.1%
7	29.8%	30.5%	28.8%	33.5%	29.2%	35.4%	38.7%	31.5%	29.4%	33.5%	32.0%
8	36.1%	37.0%	35.9%	35.9%	33.4%	45.4%	48.5%	36.0%	37.2%	39.6%	38.2%

※塗りつぶしは教科内で割合の最も高いもの（赤）と割合の最も低いもの（青）を示す

4段階評価のうち、「4 かなり当てはまる」と「3 ほぼ当てはまる」の評価を合わせると、ほとんどの共通項目で80%を超えた。

教員の授業内容や指導方法などに関する共通項目である1～6では「1 教材が工夫されるなどして、取り組みやすい授業である。」(37.3%)、「5 説明の仕方がいいのでわかりやすい授業である。」(38.7%)の割合が高くなっている。一方、「2 私は授業で学習した内容がだいたい理解できている。」(30.4%)の割合が低くなっている。また、昨年度に比べ、「4 授業中、生徒同士で話し合う機会や意見などを発表する機会がある。」の割合は1.1ポイント上昇しており、近年本県で力を入れているアクティブ・ラーニングの視点を踏まえた授業が浸透してきているとともに、教員が教材づくりに工夫を凝らし、分かりやすい授業を日常心掛けていることが分かる(第1図)。

課題としては、「2 私は授業で学習した内容がだいたい理解できている。」(30.4%)の割合がまだ低いことが挙げられる。

生徒自身の取組状況に関する項目である7～8に注目してみると、昨年度に比べ、「7 私は授業で分からないところがあったら、先生や友達に聞いたり、自分で調べたりするなどして分かるようとする努力をしている。」(32.0%)の割合は0.2ポイント上がっているが、「8 私は授業に対して意欲的に取り組んでいる。」(38.2%)とは6.2ポイントの差がある。授業に対する意欲と比べて、授業での疑問点に対して自ら進んで解決しようとする姿勢がやや低い傾向にある(第2図)。

教科ごとに見てみると、多くの教科が全体的に同様の傾向を示しているが、外国語においては、生徒の言語活動に関する項目である「4 授業中、生徒同士で話し合う機会や意見などを発表する機会がある。」(39.7%)の割合が一番高くなっていることから、生徒主体の授業が進んでいることが推測できる(第1表)。

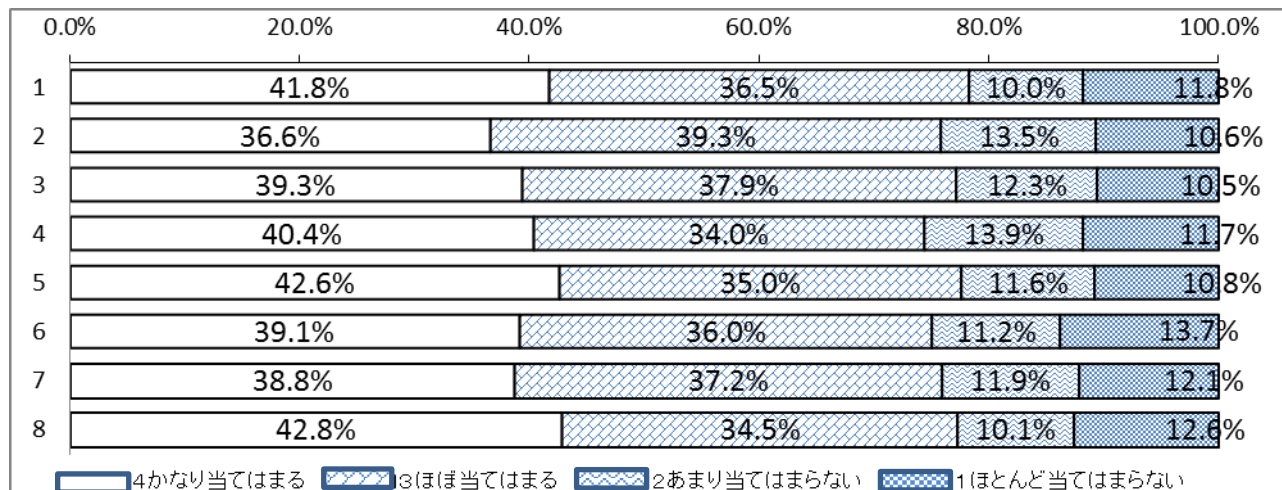
(2) 専門教科について

○ 専門教科の共通小項目に対する4段階の評価は、次のとおりである。

第2表 専門教科の共通小項目集計

共通小項目	かなり当てはまる	ほぼ当てはまる	あまり当てはまらない	ほとんど当てはまらない
1 教材が工夫されるなどして、取り組みやすい授業である。	41.8%	36.5%	10.0%	11.8%
2 私は、授業で学習した内容がだいたい理解できている。	36.6%	39.3%	13.5%	10.6%
3 生徒の理解度に合わせて、授業が進められている。	39.3%	37.9%	12.3%	10.5%
4 授業中、生徒同士で話し合う機会や意見などを発表する機会がある。	40.4%	34.0%	13.9%	11.7%
5 説明の仕方がていねいで、分かりやすい授業である。	42.6%	35.0%	11.6%	10.8%
6 生徒一人ひとりに目を配った、きめ細かい指導がなされている。	39.1%	36.0%	11.2%	13.7%
7 私は、授業で分からないところがあったら、先生や友達に聞いたり、自分で調べたりするなどして分かるようとする努力をしている。	38.8%	37.2%	11.9%	12.1%
8 私は、授業に対して意欲的に取り組んでいる。	42.8%	34.5%	10.1%	12.6%

※ %は小数第2位を四捨五入



第3図 専門教科の共通小項目集計

○ 各教科の共通小項目の評価「4 かなり当てはまる」を表にし、全教科で比較した。

第3表 専門教科ごとの共通小項目の評価「4 かなり当てはまる」の集計

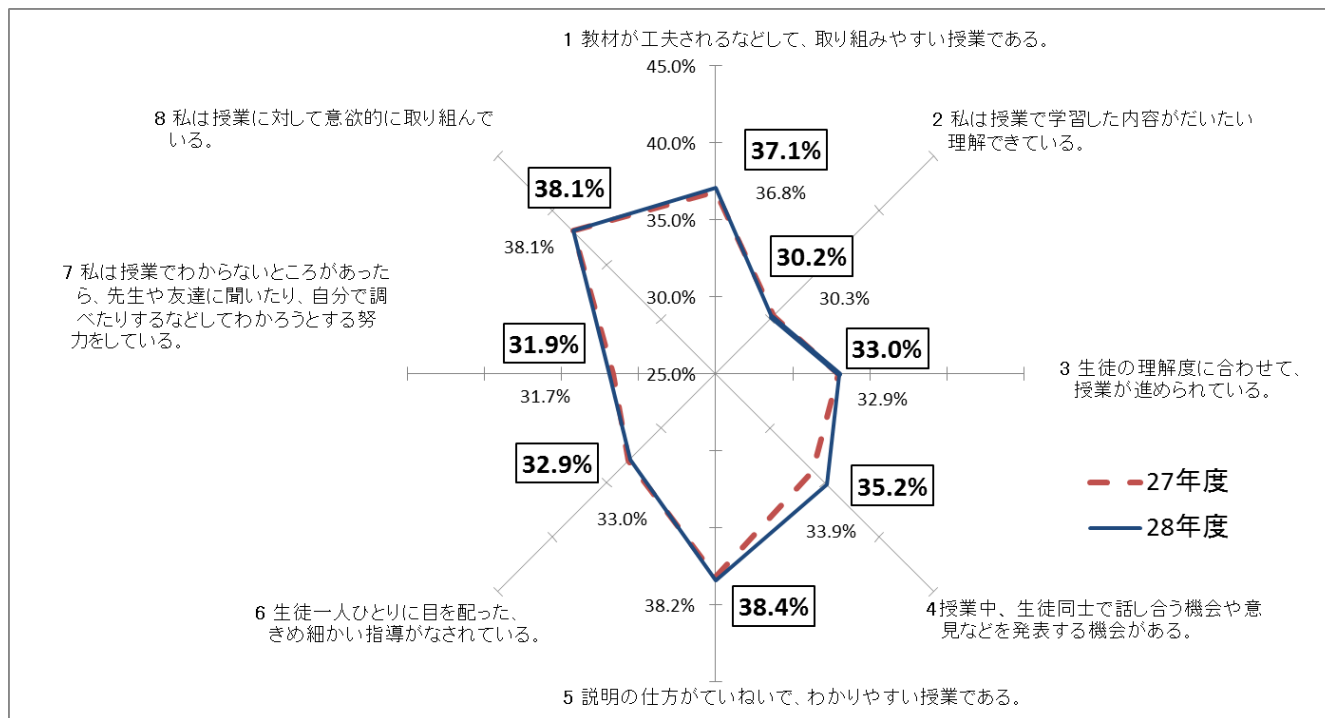
共通小項目	農業	工業	商業	水産	家庭	看護	情報	福祉	理数	体育	音楽	美術	英語	平均
1	45.7%	35.2%	39.8%	47.5%	51.3%	52.1%	41.7%	47.5%	42.3%	58.6%	58.1%	44.0%	54.7%	41.8%
2	31.6%	30.0%	33.9%	34.9%	49.6%	49.9%	45.0%	39.7%	44.1%	61.1%	64.2%	39.7%	42.9%	36.6%
3	39.6%	32.6%	36.3%	51.0%	55.1%	49.1%	41.3%	51.4%	35.6%	62.1%	61.1%	41.3%	46.9%	39.3%
4	43.0%	32.6%	37.1%	46.2%	51.3%	54.3%	46.5%	52.5%	32.8%	60.8%	58.8%	41.9%	61.6%	40.4%
5	44.8%	34.8%	40.8%	50.5%	54.5%	59.1%	46.5%	53.2%	38.0%	60.6%	64.0%	43.4%	60.5%	42.6%
6	39.8%	33.4%	37.9%	41.5%	49.2%	47.3%	41.7%	49.3%	32.5%	60.3%	62.4%	45.2%	56.8%	39.1%
7	39.4%	32.5%	37.6%	45.2%	49.7%	51.4%	42.8%	43.9%	36.1%	59.7%	61.2%	42.6%	45.5%	38.8%
8	45.6%	35.8%	41.3%	48.2%	53.2%	52.4%	43.8%	52.4%	40.6%	65.3%	67.3%	48.3%	54.3%	42.8%

※塗りつぶしは教科内で割合の最も高いもの(赤)と割合の最も低いもの(青)を示す

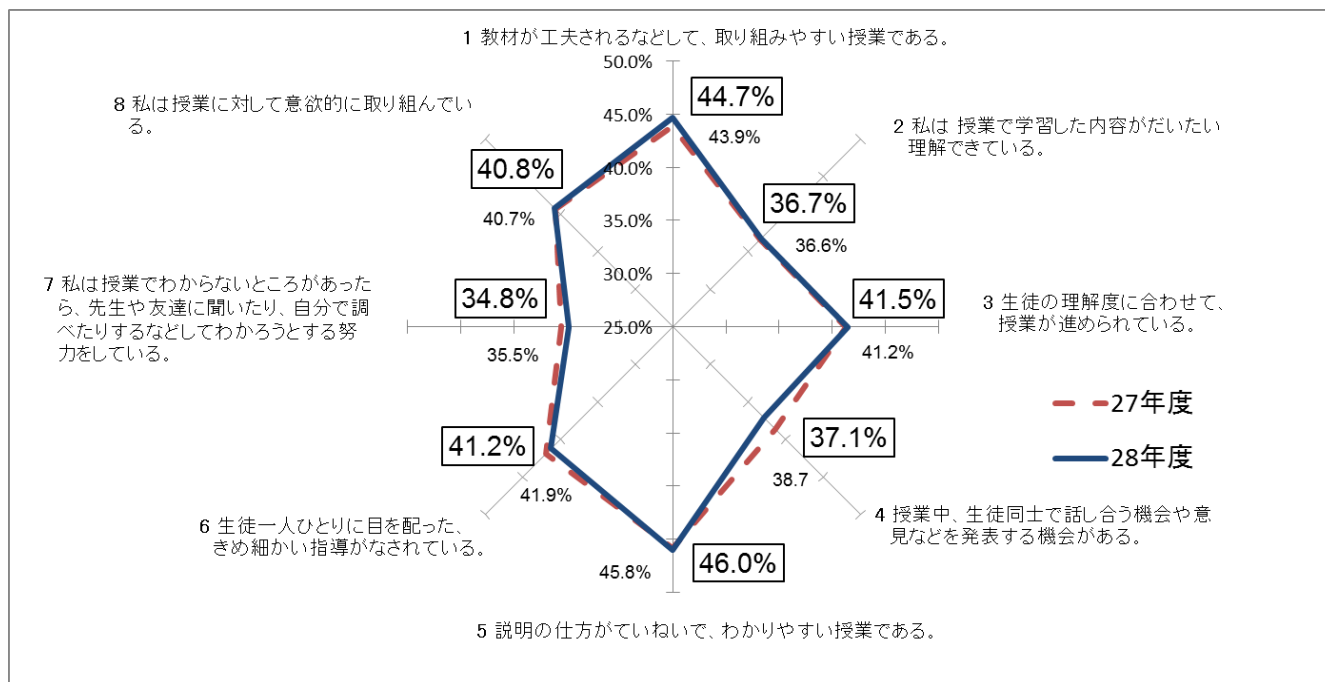
専門教科について「8 私は、授業に意欲的に取り組んでいる」と回答する割合が高く、「2 私は、授業で学習した内容がだいたい理解できている」への回答の割合が低い。生徒は意欲的に授業に取り組む姿勢はあるものの、授業内容の十分な理解には至ってない現状が見て取れる(第3表)。

(3) 全日制課程と定時制・通信制課程について

○ 全日制課程と、定時制・通信制課程の共通教科の全教科の平均について、「4 かなり当てはまる」とした回答の割合をレーダーチャートで表した。



第4図 共通教科の共通小項目ごとの評価結果「4 かなり当てはまる」の割合（全日制課程）



第5図 共通教科の共通小項目ごとの評価結果「4 かなり当てはまる」の割合（定時制・通信制課程）

5 取組状況等の調査

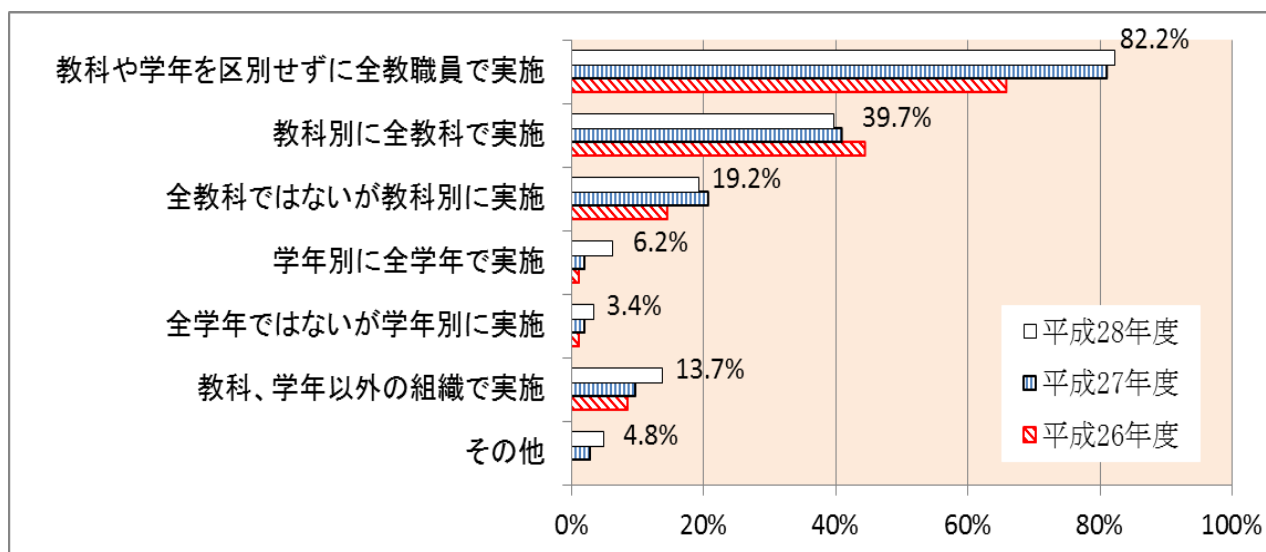
(1) 研修会について

研修会についての設問に、146校が実施したと回答している(第4表)。その実施形態は、「教科や学年を区別せずに全教職員で実施」(82.2%)が最も多く、次いで「教科別に全教科で実施」(39.7%)、「全教科ではないが教科別に実施」(19.2%)と続く。また、教科学年を解体して「教科、学年以外の組織で実施」(13.7%)となっている(第6図)。

第4表 研修会の実施の有無

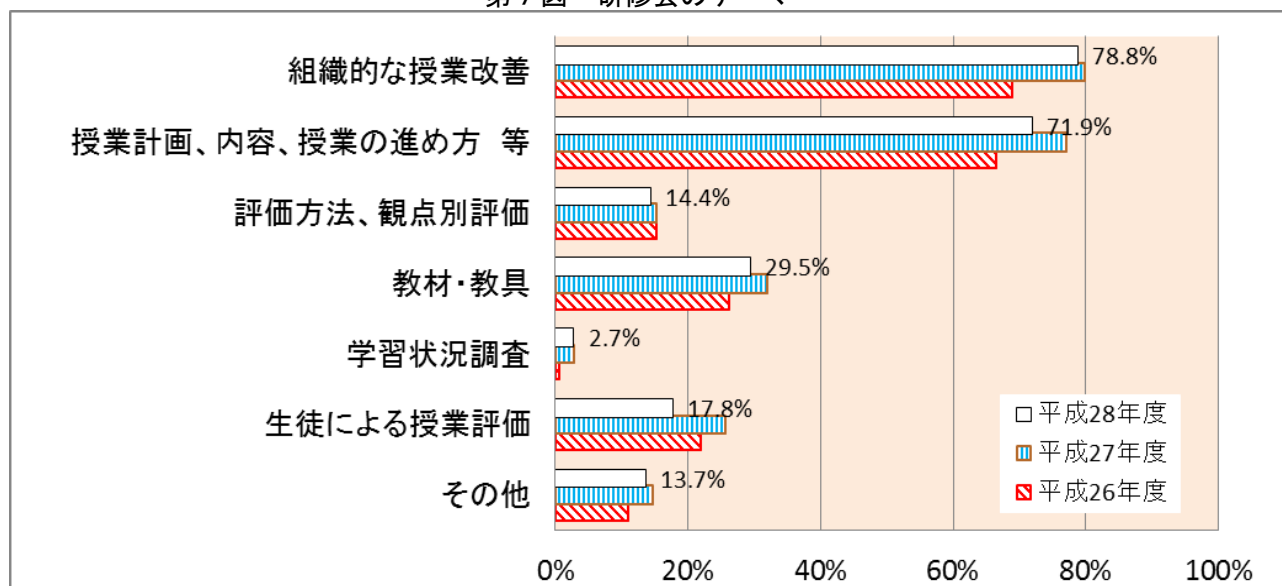
実施した(予定を含む)	146
実施していない	18

平成27年度は、「教科や学年を区別せずに全教職員で実施」(81.3%)、「教科別に全教科で実施」(41.0%)であったことから、教科ごとの研修会の割合が次第に減少し、全体での研修会が増加していることが分かる。これは従来からの教科単位ではなく、教科の枠組みを超えた学校組織全体での授業改善を図る意識が高まってきているからと考えられる。



第6図 研修会の実施形態(校数割合)

第7図 研修会のテーマ



研修会のテーマについて見てみると、「組織的な授業改善」(78.8%)と、「授業計画、内容、授業の進め方等」(71.9%)に関するものが中心となっており、過去3年間ともに圧倒的に多くの学校が取り組んでいることが分かる(第7図)。このことから、学校組織として取り組む授業改善に意識が向けられていると考えられる。

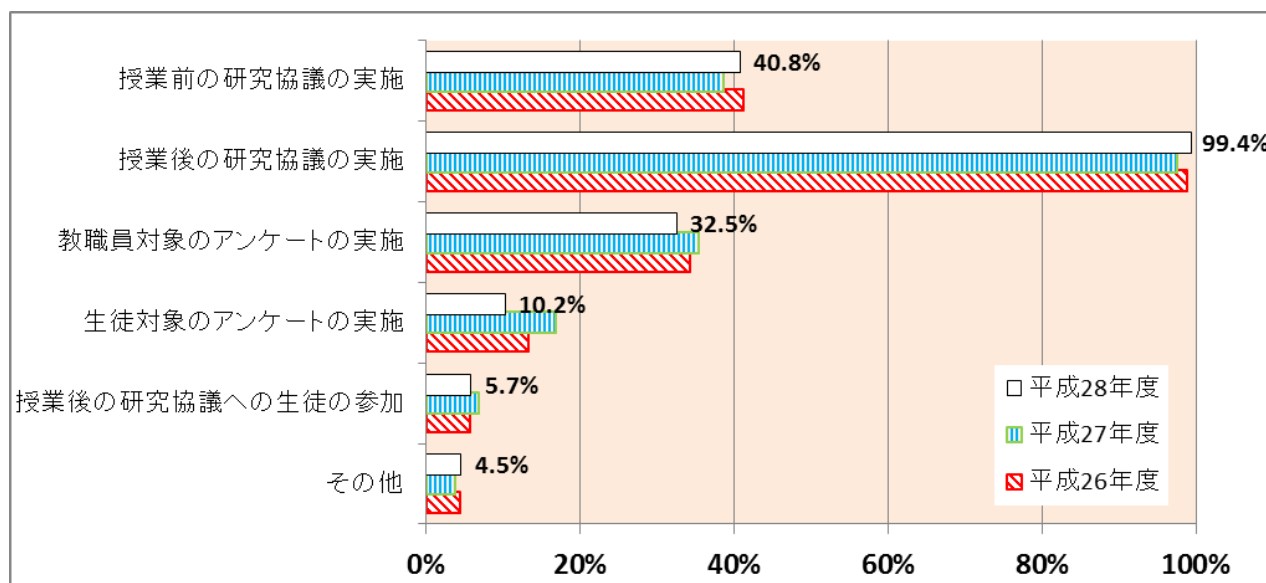
(2) 研究授業について

研究授業の実施形態としては、研修会と同様に「教科や学年を区別せずに全教職員で実施」(51.6%)の割合が最も高く、「全教科ではないが教科別に実施」(33.1%)、「教科別に全教科で実施」(21.7%)、がこれに続く(第5表)。

「研究授業を実施した際に行った前や授業後の検討会等の内容」の具体的な項目について見ると、研究授業後に研究協議を行っている学校が99.4%を占め、ほとんどの学校で実施していることが分かった(第8図)。

第5表 研究授業の実施形態

授業教科や学年を区別せずに全教職員で実施	51.6%
教科別に全教科で実施	21.7%
全教科ではないが教科別に実施	33.1%
学年別に全学年で実施	0.0%
全学年ではないが学年別に実施	4.5%
教科、学年以外の組織で実施	7.0%
その他	4.5%



第8図 研究授業を実施した際に行った授業前や授業後の検討会等の内容

(3) 公開授業について

授業前や授業後の検討会等を伴わない公開授業は、139校が実施と回答している。その実施形態は、「教科や学年を区別せずに全教職員で実施」(77.7%)の割合が最も高く、「全教科ではないが教科別に実施」(12.2%)、「教科別に全教科で実施」(9.4%)がこれに続く(第6表)。

第6表 公開授業の実施形態

教科や学年を区別せずに全教職員で実施	77.7%
教科別に全教科で実施	9.4%
全教科ではないが教科別に実施	12.2%
学年別に全学年で実施	1.4%
全学年ではないが学年別に実施	2.2%
教科、学年以外の組織で実施	3.6%
その他	5.0%

「教科や学年を区別せずに全教職員で実施」については、研究授業の実施形態(第5表)と比べ

て約20ポイント以上高いことから、公開授業においては、教科や学年に関わらず相互に授業を見合うような取組がより広く実施されていると考えられる。

(4) その他の取組について

「『生徒による授業評価』、校内の研修会、研究授業、公開授業以外の授業改善に向けた取組」や、「『生徒による授業評価』以外の授業改善に向けた取組について、平成29年度に新たに取り組む内容、改善点」、「『生徒による授業評価』以外の授業改善に向けた取組について、自校の取組で他校の参考になると考えられる内容」の主な回答は次のとおりである。

- ・各教員ごとに生徒による授業評価の集計を行い、その後の各教員の授業改善の参考とする。
- ・円グラフによる全体的評価を、項目別の分布が分かる棒グラフに変更したことで、4, 3, 2, 1の評価の分布が一目で分かるようになり、授業改善に役立てることができた。
- ・授業の始めに1時間の授業の見通しや目標を明示しているかの確認を新たに項目内容に追加した。また、授業の終わりには1時間の振り返りや確認を行っているかという項目内容を新たに追加した。
- ・教員に対する授業アンケートを作成し、目標を達成できていたかどうか、生徒が主体的・協働的に授業に参加しているか、という項目を意識して研究授業を見ることができるようにする。
- ・可動式ホワイトボードやミニホワイトボードを整備し、アクティブ・ラーニングの視点を踏まえた授業を推進した。
- ・マグネットスクリーンを全HR教室に設置したことでICTの利活用が推進された。
- ・小中合同研究会へ参加した。中学と高校の接続を考え、学びに関するワークショップを数回行い、課題解決に向けて話し合うなど、6年間を通じた指導の研究をしている。
- ・夏季休業中に主に若手教員を対象とした授業デザインの勉強会を実施している。
- ・授業をビデオ撮影し、職員全体の研修会で活用している。教科指導実践例集を各教科で作成し、集約している。
- ・新たな学習評価（ルーブリック評価）の実践や新しい授業スタイルの実践を研究している。
- ・「確かな学力の定着」を目標に、1年次に「基礎力育成シート」（ドリル）を作り、朝のHR時に実施する。
- ・6年間実施した第1学年のモジュール授業をTTで担当し、更にグループ学習を導入して、学習支援の大学生を活用してきた。他の授業も第1学年でTTを導入してきた。
- ・研究紀要を作成し、本校の取組を他校に発信する予定。

6 生徒による授業評価の成果と課題等について

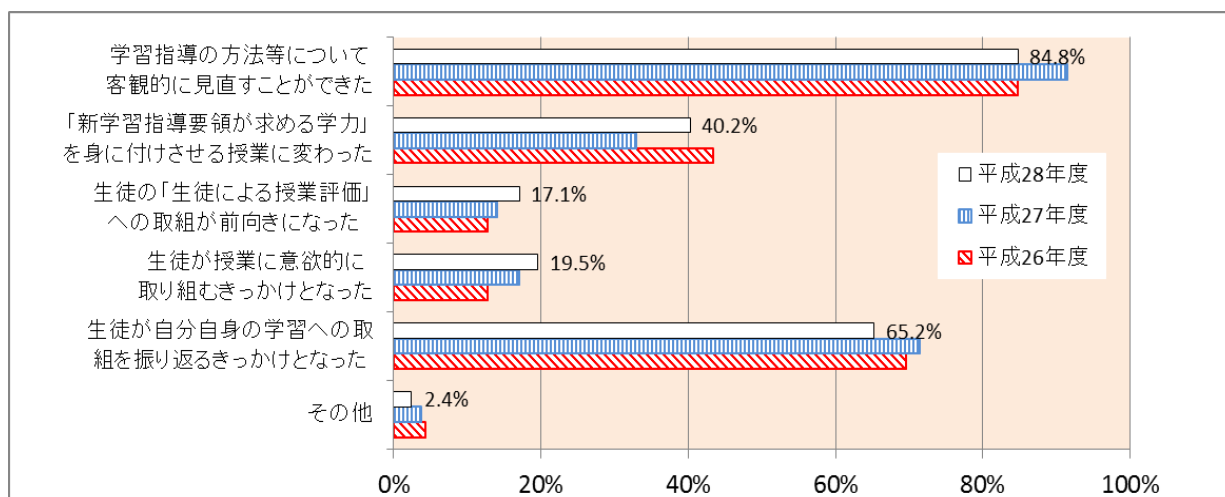
(1) 成果について

「生徒による授業評価」の結果について授業改善に「十分に反映された」（30.5%）と「少し反映された」（66.5%）とする肯定的な回答は97.0%と高くなっている（第7表）。

「生徒による授業評価」の成果の具体的な内容をみると、「学習指導の方法等について客観的に見直すことができた」（84.8%）の割合が最も高く、次いで「生徒が自分自身の学習への取組を振り返るきっかけとなった」（65.2%）の割合が高かった（第9図）。これらのことは、「生徒による授業評価」が各学校の授業改善の契機となっているとともに、生徒自身の学習への取組の振り返りの契機にもなっていることを示しているといえる。

第7表 生徒による授業評価の成果

十分に反映された	30.5%
少し反映された	66.5%
あまり反映されなかった	2.4%
反映されなかった	0.0%
無回答	0.6%



第9図 生徒による授業評価の成果等

(2) 課題及び解決策

①生徒の回答状況について

「好き嫌いで評価する生徒が多い」、「真面目に回答してくれない」、「全てに同じ数字を記入してしまう生徒が増えている」など、生徒による評価の信頼性を疑問視する回答が多く見られた。この課題を解決するためには、生徒が真摯に授業評価に取り組めるような意識を持たせることが必要である。例えば、「回答結果はどのような状況であったか」、「どのように回答状況が分析されたのか」、「授業評価の結果を踏まえて、どのように授業改善が図られたか（図っていく予定なのか）」など、この調査がどのように活用され、教員が授業改善にどのように取り組んでいるかなどを生徒に説明し、評価の意義や必要性をアピールする機会を設けた上で、実際の授業の中で授業改善にいかす姿を生徒に示していくことが大切だろう。LHR、学年集会、学年通信をとおして、授業評価がなぜ必要なのか、どのような点で有効なのかなどについて、しっかりと納得させた上で、回答させる工夫をしていくことが求められている。

②準備・集計作業について

準備や集計作業に時間が掛かる、消費される紙が膨大であるという回答も多かった。担当者が異動した後に、自作の集計ソフトの点検、変更が難しいという意見や、全県統一の集計ソフトを提供してもらいたいという要望があった。

集計作業の簡素化の工夫として、マークシートやスキャナーを利用している学校の例がある。マークシートの場合は紙の消費量が多くなる問題は残ってしまうが、各教科担当者が取り込み作業を行えば作業時間は短縮される。

また、改善案として定期試験や成績処理と重なる12月を避け、11月の前半に実施時期を移したらどうかという提案もあった。

③小項目の評価について

項目内容について、教科・科目によってその性格が異なるのに、共通小項目は同じ観点で良いのかという疑問や、評価しにくい項目が存在するといった回答も例年寄せられている。

各校ごとに8個の共通小項目以外の項目を立てることが可能であり、部分的に教科・科目の特性を踏まえた学校独自の小項目を立てている学校もあるので、学校独自の取組を評価・検証したり、この調査をより有効活用するために、学校独自の小項目を積極的に活用していただきたい。

7 生徒による授業評価のよりよい活用のために

生徒の確かな学力を向上させるためには、「組織的な授業改善」を進めることが必要となる。そのための一つの方策として「生徒による授業評価」を積極的に活用していただきたい。

◎教員個人の授業の振り返りとして活用

生徒からの評価を通して授業の課題を改善し、指導力の向上につなげる。

◎組織による授業改善を目的とした校内授業研究として活用

R P D C A サイクルにおけるRとCのデータの根拠とする。詳しくは平成24年3月神奈川県教育委員会発行の冊子「組織的な授業改善に向けて」や、平成26年3月県立総合教育センター発行の研究成果物冊子『組織で取り組む授業研究の工夫に関する研究—教員間の共通理解に基づく「協働する授業づくり」—』、平成27年3月県立総合教育センター発行の『組織で取り組む授業研究の工夫に関する研究—目標の共有化による「協働する授業づくり」—』を参考にしていきたい。

R (調査) : 学校の実態と課題の把握

P (計画) : 実践・研究の計画 テーマ(研究テーマ)の設定

D (実施) : テーマに即した授業づくりの実践

C (評価) : 授業づくりの評価や目標達成状況の評価

A (改善) : 更なる改善の実施

◎学校独自の小項目設定による活用

「生徒による授業評価」の共通小項目だけでは生徒の実態を把握することが難しいと考えられることがある。この場合は、学校の実情に応じて学校独自で小項目を作成することができる。いくつかの例をあげるので参考にしていきたい。

○指導の工夫についての評価(例:学習目標が明確である・ICTの利活用を進めている など)

○ガイダンス指導についての評価(例:授業の始めや終わりに学習内容のあらまし〔見通し、目標・意義〕を示したり、学習したことを振り返ったりする指導がなされている など)

○生徒との関係についての評価(例:学習内容が分かりにくかった場合に質問や補習などでいいいに対応してくれる など)

○教材・教具についての評価(例:板書やプリントが整理されていて見やすく、ノートをとりやすい など)

○学習効果についての評価(例:学力や技能の伸長を実感できた など)

○学習内容に対する興味についての評価(例:この授業を受けて、教科・科目に対する興味をより持てるようになった など)

○生徒自身の自己評価(例:予習・復習を行っている など)